紙面拝見

市民の世紀へ転換を

いきいき福祉会専務理事
小川　泰子

明けましておめでとうございます。21世紀に入って17回目の新年を迎えます。この1年はどのような年になるのか、どのような年にしようかと、これまでは考えてきました。でも、今年は何かが違うと感じている人が多いのではないでしょうか。その理由は、「この1年」というより「21世紀」をどのような世紀にしたいか、しなければならないかを考えざるを得ない出来事が次々と起こった16年間だったからでしょうか。

底知れない「不安」が広がるテロ、移民問題、内紛、いじめ、失業、格差・貧困、感染症、人口構造、そして原発、基地問題、差別等々、世界中が同様の問題を抱え揺れています。もちろん、いつの時代もこうした「不安」はあり、人間は知恵を結集して不安を小さくする努力をし時代を乗り越えてきました。しかし、これまでとは何かが違う。向かっている方向が時代をさかのぼっているような気がするのは私だけでしょうか。

何とかこの「不安」や「怒り」、「失望」を「希望」に変える市民のエンパワーメント、それが今年のテーマと考えます。国益のためでもなく、特別な権力者のためでもなく、市民による市民のための「市民」の本気と覚悟で「いのちを守る」―。それが21世紀の100年であり、市民の〝分かち合いの100年〟の転換にしなければならないと思います。

1月20日、米大統領にトランプ氏が就任します。そのことがもたらす不安と期待に世界中が揺れています。決して「戦争の20世紀」をどのようなことがあっても2度と繰り返さないように、21世紀は「市民の世紀」にしなければならない。

20世紀に世界経済をリードしてきた先進諸国は人口減少、少子高齢社会に突入しました。科学技術の発展で人生60年時代から85年、90年時代へと変わり、生き方・働き方も変わりました。素晴らしいことです。いのちの価値を尊重し合う知恵こそが人間のすごさです。09年に出版した共著「このまちで、ともに暮らそう」で書いた「市民の地域経営力」を私は今でも繰り返し発信している。また、仲間が書いたこんな文章も。「障害のある本人は人口比5%かもしれないが、その人の両親、兄弟姉妹、祖父母まで入れると、人口の40%以上の人にとって、障害福祉の問題は三親等以内の肉親の問題であることが分かる。さらに、親しい友人に障害児が生まれたら、障害福祉のことは決して他人事ではない」

障害者のみならず、高齢者のこと、貧困、いじめ、災害、どれ一つとっても自分に関係ないことなど何一つない、「自分事」として向き合う。だから安心して「ともに暮らそう」と言える地域をつくること、それが最大の共通ニーズであり、「市民の世紀」なのです。

（おがわ・やすこ　ラポール三ツ沢施設長。神奈川大学非常勤講師。一般社団法人インクルージョンネットかながわ理事。横浜市港北区在住）